

2月13日 きっず☆kocho『月と地球と神様と』

「歌とダンスのエンタメ系」とだけあって、まず幕あきの歌がとても良かったと思います。しっとりした曲からの始まりは、なかなか雰囲気作りが難しいものですが、5人の歌はピッチも揃っていて、聴いていて心地よかったです。ピアノの伴奏や紗幕、星球といった照明も、オープニングのしっとりした雰囲気を上手に作っていました。

全体的によく稽古をしているのか、特にメインとなる6人のテンポがよかったです。ボケやツッコミ、モノマネや神様の変装もいさぎよさを感じ、お芝居を楽しんでいることがよく分かりました。また、お二人のお母さんがナチュラルな演技をされていて、二つのグループが上手に対比されていたと思います。

一方で、せっかく5人の神様が登場するので、それぞれの神様のキャラクターがもっと際立ってもいいと思いました。アマテラスは比較的分かりやすかったのですが、他の神様もそれぞれの役割が物語に直接関わってくるような特技などがあれば、より登場する意味がはっきりしたのではないかと思います。また、性格の違う5人の神様がなぜ一緒にいるか、という理由も観客としては明らかにして欲しかったです。

特にこの作品は、後半みずきの過去が明らかになる場面からが大切になると思います。少しずつ、彼女の核心に迫っていく物語には引き込まれましたが、最後にみずきが過去と決別するきっかけが若干弱かったと思います。神様の歌や励ましによるものなのか、何か別の理由があったのか、みずきがなぜ踏み出そうと思ったのかが一度見ただけでは残念ながらよく分かりませんでした。

幕間トークでもおっしゃっていた「命の大切さ」や「いじめられてる子の心情」について考えてほしいというメッセージは、今回の作品でも十分に伝わってきました。さらに、劇を作っている皆さんがどのように「命」や「いじめ」に向き合うかを作品の中で明確に示してくれれば、より作品のメッセージ性が豊かになるのではないのでしょうか。

6人の役者さんには明るさを感じて、好感が持てます。その意味では、ちょっとしっとりと終わりすぎたかな、というのが個人的な印象です。前半で見せてくれた神様のコミカルさが、みずきの迷いを解決していくという方法もあったかもしれません。

須川 渡（大阪大学演劇学）